

I : 宗教現象としてのキリスト教

<前回> 宗教的象徴・宗教言語

1. 「M」：宗教的象徴・象徴世界、媒介機能
2. 「言葉の宗教」としてのキリスト教 → 言語・意味・聴覚の優位
3. キリスト教の神表象：
 - 父なる神（軍事、身体、社会関係）、子なる神（ロゴス、魚）、聖霊（鳩）
4. 媒介機能の二つの次元 → 強力な媒介機能 → 究極的関心・聖なるもの
多チャンネル
 - ①意味の媒介 → 言語（ラング、パロール）
 - 体系性：記号体系内における諸記号との関係（差異性） → 記号論
 - 「意味は実体ではなく関係である」
 - 恣意性： → 正当化の問題
 - ②力の媒介（効果）
 - 意識・無意識・感性・身体の諸レベルにおける効果 → 説得力
5. 宗教的実在とは何か？ 実在論か反実在論か、有神論か無神論か
6. 言語に注目する → 争点：宗教言語の指示機能の評価
フレーゲの言語哲学：意味と指示との区別
7. 宗教言語、とくに隠喩について
8. 新しい隠喩論の展開：隠喩は言葉の装飾ではなく、現実についての新しい見方（認知）の提示である（一度の指示の廃棄にもとづく二度の指示の開示）。
 - 第一度の指示：日常経験レベルにある対象・出来事への指示
 - 第二度の指示：第一度の指示の廃棄を前提として開示される、日常経験レベルよりも広義の実在（理念的、詩的、宗教的など）への指示、日常的な事物や出来事についての新しい見方に関わる。
9. 現実を別様に見る能力の意義（→ 倫理、芸術、そして宗教の意味が問われるレベル）
 - 現実の批判的相対化する力＝夢見る能力
 - 新しい自己の発見と新しい生き方
10. 宗教的実在とは、宗教言語の第二度の指示機能において開示された新しい実在

第6講：儀礼と sacrament

1 儀礼と共同体

1. 儀礼の位置付け

宗教を理解するには、宗教の主観的側面である経験・思想と、客観的側面である制度・組織の両面からアプローチしなければならない。神話が主観的側面に属するのに対して、儀礼は客観的側面に属していると考えられることができるが、神話も儀礼も宗教的象徴

からなる象徴体系という点では共通している——儀礼は、「一定の目的に向けてパターン化された宗教的行為（パフォーマンスとアイテム）の象徴体系」と形式的に定義できる——。宗教的象徴の媒介機能について、前回の講義では、意味の次元と力の次元を区別し説明したが、神話においては意味の次元における媒介機能が顕著なのに対して、儀礼では力の次元での媒介機能が顕著であると言えよう。神話と儀礼はしばしば相互補完的に関係づけられる——礼拝式といった大規模な儀礼や祭りにおいては、神話と儀礼の相補性が明確に見られる——。

2. 現代宗教学において、儀礼研究は様々な仕方で行われているが、宗教的象徴の場合と同様に、儀礼にも様々な種類のものがあり、統一的な理解は容易ではない。儀礼の統一的な理解を代表する研究方法としては、機能主義的研究、構造主義的研究が代表的である。

- ・ 隔離の儀礼（俗なるものから聖なるものを分離する儀礼。宗教的なタブーに関連する。忌み、喪中の儀礼、鎮魂儀礼）
- ・ 聖化の儀礼（俗なるものが本来有する聖性を現実化させたり、俗なるものと聖なるもの接近させるための儀礼。清めの儀礼、禁欲的行為を伴う修行）
- ・ コミュニケーションの儀礼（俗なるものが聖なるものと交流するための儀礼。礼拝や祈り、供犠、巡礼など）
- ・ 知の儀礼（聖なるものによって開かれた秩序・コスモスにおける自己の位置や、自己と聖なるものとの関わりなどに関する知識を獲得するための儀礼。占いなど）
- ・ 力の儀礼（聖なるものの力を操作し、他のものに影響力を行使しようとする儀礼。呪い、妖術、呪術的な治療儀礼など）

・ 機能主義的研究：儀礼が社会的心理的なシステムの維持に関していかなる機能を果たしているかを分析する。不安を取り除き、動機付けを強化するといった心理的効果の研究（古典的なところでは、マリノフスキー）、共同体の統合の強化や中心的価値の表出といった共同体レベルでの効果についての研究（古典的なところでは、ラドクリフ・ブラウン）。

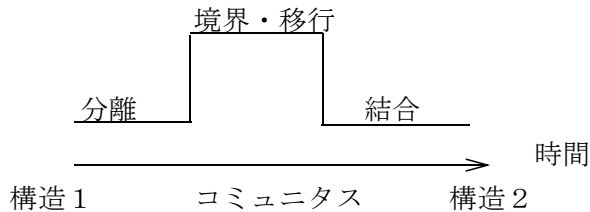
・ 構造主義的研究：複雑な象徴体系としての儀礼に共通する深層構造の解明をめざす。古典的な研究としては、レヴィ＝ストロース、ヴィクター・ターナー、エドモンド・リーチなどの研究がある。構造主義に関しては、本講義でも後ほど聖書の構造分析を説明する際に、より詳しい説明を行う。

3. 通過儀礼の分析

人間の一生には、様々な節目（誕生、入学、卒業、成人、入社、結婚、転職、退職、死など）があり、それを無事に通過することは、重要な課題となる——この通過には失敗のリスクが伴っており、人生の節目は危機的な時でもある——。節目を無事に通過することはその個人にとって重要なだけでなく、共同体・社会にとっても重要な意味を持っており、通常、社会はその構成メンバーが節目を無事に通過できるように支える仕組みを備えている。成人式や結婚式などの通過儀礼はその代表的な仕組みに他ならない。宗教共同体の場合で言えば、新たにその共同体に加わるための儀式（＝入会儀礼・イニシエーション）などは通過儀礼の代表例であり、キリスト教においては、洗礼式と呼ばれる儀礼がそれに相当する。

4. 儀礼の構造分析（境界・リミナリティ・コムニタス）→ 構造とその更新

通過儀礼は、世俗社会から宗教共同体まで、実に様々なものが存在するが、構造主義的儀礼研究（リーチ）によって、これら多様な通過儀礼の共通の深層構造を取り出すことができる。



通過儀礼は、それまでの社会的身分（構造1）から、新しい社会的身分（構造2）への移行を象徴的に表現し、当事者の動機付けを強化する機能を果たす儀礼であるが、古い身分・構造からの分離、身分の移行、新しい身分・構造への結合という三つの構成要素（儀礼素）の継起（シークエンス）という深層構造を確認できることについては、比較的容易に理解できるだろう。

社会的身分（社会構造を基盤とする）の変化を象徴する「境界・移行」の儀礼素は、確定した身分の不在・構造の流動化（どっちつかずの曖昧さ）を表現しており、ターナーは、この状況をコムニタスと呼んでいる。地位や財産や職業などの指標によって示された社会的人間関係の一時的無効であるコムニタス——身分の逆転、平等性の出現——は、日常的秩序（束縛）からの解放・構造の止揚である点で、構造にとっての脅威となる。しかしそれと同時に、構造に蓄積されたストレスを解消し構造の安定化に寄与する。

祝祭・カーニバルなどの規範的コムニタス／修道院・千年王国運動などの共同体、あるいはカウンター・カルチャーや政治運動などの特殊な社会／スポーツ観戦などにおける自然発生的なコムニタス

5. 洗礼式

キリスト教の入会儀礼である洗礼式では、水の象徴が用いられる。つまり、聖職者によって、洗礼希望者の頭に水が垂らされる（＝滴礼、あるいは全身を水に浸ける浸礼）。これは、福音書において報告されたヨルダン川におけるイエス自身の洗礼に遡る（洗礼者ヨハネによる。マルコ 1.9-11）が、水の象徴は、キリスト教に限らず、多くの宗教で使用される（神道における禊ぎ）。その理由としては、水が次のような両義性と結合しやすい点が挙げられる。

水：過剰な水と過小な水は人間に死をもたらすが、同時に水は生命の源である。

生と死の両義性

↓

古い身分に死んで、新しい身分に再生する。

Q：キリスト教の洗礼式とは別の通過儀礼の事例について、先の述べた深層構造を確認せよ。

6. サクラメント (sacramentum)

キリスト教においては、洗礼式は宗教共同体（教会）で行われる一つの儀式であることを超えて、サクラメントの一つに数えられる。サクラメントとは、「不可見の神・神の恩恵の具体的徴」と説明されるが、これまでの本講義で導入した用語を用いるならば、非日常的な神あるいは神の働きをヒエロファニーとして顕わす宗教的象徴(象徴体系)とすることができる。サクラメントとして認められる儀礼に有効性を与えるのは神自身であり、人間はこの儀礼に参加することによって、神の恩恵に与ることができると考えられる。

7. ローマ・カトリック教会におけるサクラメントは、次の7つである。

cf:プロテスタント教会 (①と⑥のみ)

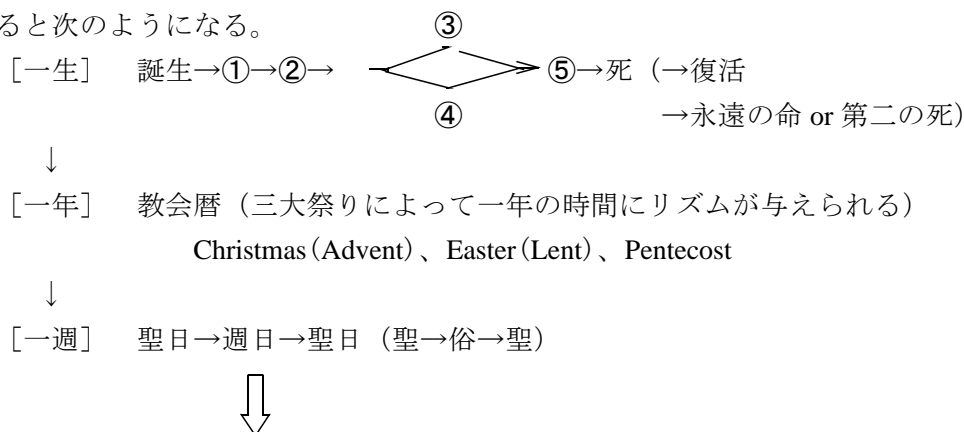
- ①洗礼 (baptism) ②堅信 (confirmation) ③叙階 (holy orders)
- ④婚姻 (matrimony) ⑤終油 (extreme unction)
- ⑥聖餐 (eucharist) ⑦悔悛 (penance)

サクラメントは神自身の働きによるのであるから、いったん執行されたサクラメントを人間の都合で打ち消すことはできない。ローマ・カトリック教会では、結婚はサクラメントであり、取り消し不可能である、つまり、離婚は教会法によって禁止されている（もちろん、市民法・民法的には離婚可能であるが）。それに対して、プロテスタント教会では、離婚は認められている（もちろん、奨励されているわけではないが）。

Q: キリスト教会では、伝統的に幼児洗礼が行われてきたが、なぜ生まれて間もない時期の幼児に洗礼を施すことが行われるようになったかについて、理由を考えよ。
ヒントは、幼児洗礼の歴史的背景には、キリスト教の国教化が存在すること。

8. キリスト教的な時間秩序 (時の形態化)

ローマ・カトリック教会の7つのサクラメントによって、キリスト教徒の一生を図式化すると次のようになる。



この「生涯—1年—1週」の重層的な時間は、「キリスト教的なライフ・スタイルの時間軸」を成している。

キリスト教の信仰に生きるとは、こうして質的にリズム化された時間感覚(時間経験)をもって生活することを意味する。それは、宇宙・歴史全体のリズムと個人的生のリズムの同調、永遠との関わりにおいて生きる生命の時間性に他ならない。

9. 第1講から第6講までの講義について、その結論をまとめるならば、次のようになる。

「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。それは、次の三つの相に分節できる。

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

2 キリスト教と祭り

1. 「祭り」は、神話と儀礼からなる複合的な象徴体系である。

→ 現代宗教学における神話論と儀礼論がすべて適用できる（神話論については、後の講義を参照）。

2. 祭りの歴史的展開としては、大ざっぱに言って、「犠牲を捧げる儀式→フェスティバル＝祝祭」の移行が指摘できるが、長い伝統を有する祭りについては、その歴史的起源と変遷が問われねばならない。

3. 祭り研究の三つのポイント

1) 祭りの歴史的起源と変遷

古代イスラエルの祭り：農耕的季節の祭りから歴史的記念祭へ

救済史における意味づけ

仮庵祭（秋の収穫の祭り、9-10月、1週間）

刈り入れの祭り（小麦の収穫、大麦の刈り入れから7週間後の
ニサンの月<3-4月>16日に行われた。7週の祭り、五旬節）

過越祭（イエス時代、ニサンの月の14日）

仮庵祭（出エジプト23:16、34:22）

23:16 あなたは、畑に蒔いて得た産物の初物を刈り入れる刈り入れの祭りを
行い、年の終わりには、畑の産物を取り入れる時に、取り入れの祭りを
行わねばならない。

34:22 あなたは、小麦の収穫の初穂の時に、七週祭を祝いなさい。年の終わ
りに、取り入れの祭りを祝いなさい。

23 年に三度、男子はすべて、主なるイスラエルの神、主の御前に出ねば
ならない。

24 わたしはあなたの前から国々の民を追い出し、あなたの国境いを広く
するが、あなたが年に三度、あなたの神、主の御前に入るために上るとき、
だれもあなたの土地を侵すことはないであろう。

25 あなたは、わたしにささげるいけにえの血を、酵母を入れたパンと共に
ささげてはならない。過越祭のいけにえは翌朝まで残しておいてはな
らない。

↓

農耕の祭りから歴史的記念祭への祭りの歴史化は、古代イスラエル宗教からユダヤ教への変化と密接に関わっているが、これは、バビロン捕囚以降の歴史的状況における、古代イスラエルの宗教の排他的な一神教としての再構築を背景

としているように思われる。

2) 祭りの機能：人間を日常性に埋没した状態から非日常的・聖なる実在の経験へと連れ出し、個人と共同体を再生・リフレッシュさせる（構造・秩序の再生のメカニズム）。構造の廃棄を通じた社会構造の更新。先に見たコミュニタスに対応。

3) 祭りの構造：劇・ドラマとしての祭り（シナリオとしての神話）

儀礼構造の分析によって、聖なるものの移動を解明する

4. キリスト教の三大祭り

イースター、ペンテコステ、クリスマス

キリスト教の三大祭りの内、イースターとペンテコステは太陰暦、クリスマスは太陽暦にしたがって、日時が決定される。これは、一見奇妙な事態とも思われるが、キリスト教が、古代イスラエルの伝統とヘレニズムの伝統との交差するところに成立したことを反映している。

6. 世俗化・近代化：共同体統合の祭りから、文化財・観光資源としての祭りへ

生きられた・参加する祭り 見る祭り

社会の近代化は、伝統的な祭りを大きく変容させることになる。キリスト教のクリスマスの変容もこうした文脈で論じられる。

7. 祭り研究（フィールドワーク）の手順

ex. 東アジアのキリスト教のフィールドワーク

- ① 予備調査 → 調査計画立案
- ② 調査・インタビューの実施
- ③ 分析：歴史的起源と変遷、機能、構造
- ④ まとめ → レポート作成

<参考文献>

1. エドモンド・リーチ『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店
2. ヴィクター・ターナー『儀礼の過程』思索社
3. 竹沢尚一郎『象徴と権力——儀礼の一般理論』勁草書房
4. 神田健次他編『総説 実践神学II』日本基督教団出版局
5. O.クルマン『クリスマスの起源』教文館
6. 脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学3 祀りへのまなざし』東京大学出版会
7. 柳川啓一『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房
8. 藺田稔『祭りの現象学』弘文堂
9. 宮家準『宗教民俗学への招待』丸善ライブラリー